

『時にはフビが舞う如く』

鈴木剛介

2019/11/19---2019/11-21

フビ:

タカ目タカ科に属する鳥類の一種。トンビとも言う。主に上昇気流を利用して輪を描くように滑空し、羽ばたくことは少ない。猛禽類。

高広(たかひろ)は、貧乏になりたかった。高広は金持ちだった。高広には、1京(けい)の資産があった。

高広は都心の高層マンションの39階に、母方の祖母と共に暮らしていた。記憶にある限り、ずっと。両親のことは、何も知らなかった。祖母も何も教えてくれなかった。誰も何も教えてくれなかった。ただ、祖母はとても優しくかった。

高広は、公立小学校の5年生。普通の上履きを履き、普通の給食を食べる。友だちも、近所の普通の家庭の子どもだ。自分と祖母が住むマンションも、120平米の3LDKではあるが、ものすごく頑張ったサラリーマンが買えない額ではない。単に資産がある。それだけのことだった。途方もない資産が。

高広は、小学生にしては整った大人びた顔立ちをしており、身長はクラスで後ろから三番目。細身。というよりは「スマート」。私服は祖母の見立てで、品もセンスも良く、ママさんたちから絶大な人気があった。成績は学年トップ。ミニバスに所属しており、「将来の夢は、カイリー・アービングみたいな選手になること」と冗談を言っても、場が白けないだけの実力を持っていた。高広のクラスでは、男子と女子の交流があまりない。だから、自分が女子からどう見られているのかは知らない。でも、好きな女の子はいた。同じクラスの国分桃代さん。学内では目立って可愛い子で、クラスの男子の大半は、高広と同じ思いを抱いていた。高広が他の男子と違ったのは、唯一、国分さんに告白して振られた経験がある人間だということ。三日前、高広は、国分さんへの慕情を抑えきれなくなり、屋上校庭の片隅に無理やり彼女を連れて行って、言った。

「1億円払っから、僕と付き合っつて下さい」

じ。

「本気で言っつてゐるのっ。」

国分さんは、眼を大きく開いて黙り込んだ後に、小な声で言った。

「本気です。1億円でダメなら、2億円出します。僕と付き合っつて下さい」と、高広は、この上もなく真剣な顔で言った。

「タカヒロくん、頭、狂っつてゐる」

国分さんは、少し脅(おび)おびえたように目つきで高広を睨むと、逃げるようにその場を去った。高広は後に知るようになる。小学生の気持ちには「まだ」金で買えない、ということとき。告白した

ら、気が済んでしまい、国分さんへの恋心は、それであっさりと醒めてしまった。

2

高広の資産は、祖母の名義で東京三菱UFJ銀行に一括して「1京円」として、預金してあった。高広は祖母名義のキャッシュカードと自分しか知らない暗証番号で、ATMから自由に金を引き出すことが出来た。事実上、無限に等しい金を。

高広は、母親がまだ10代の時に産んだ子で、血縁の父親は70代の高齢。そして、その父親の曾祖父(そうそふ)は、世間の表舞台にはあまり名の出ることのない、世界最大閥(けいばつ)の、もつともオリジンとなる人物の直系だった。顔も名前も知らない高広の父親は、ややこしい相続の手続きを、あらゆる金融手段を駆使して、処理し、自分が継いだ金のすべてを、ただ一人の実子である息子が自由に使える状態にセットアップした直後に、心臓発作で死亡した。母親は、高広を出産した直後に自殺していた。だから、育ての親である祖母は、高広には、何も語らなかつた。高広には、自由に使えるお金がとてたくさんある、ということ。そして、そのお金を高広に与えてくれた人は、「お金から学ぶことが、一つでもあればいい」と言い残した。こと以外には、そして、高広は小学5年生にして、既に金について多くのことを学んでいた。

「金で買えないものはない」

という言葉を、時折、目にしたり耳にしたりした。大人なのに、アホ過ぎる。と高広は思う。お金をたくさん払う、と言ったのに、国分さんは、僕とは付き合ってくれなかつた。持って生まれたポテンシャルだけで、フリースローとレイアップの9割は入るし、ドリブルで三人抜いたこともあるけれど、カイリー・アービングのスキルは、どれだけの大金を積んでも手には入らない。運動して汗をたくさん流した後は、とてもスッキリした気分が気持ちいいけれども、そのスッキリとした爽快感も、お金では買えない。いくら、お金を払っても、自分で努力して勉強しなければ、知識は自分の頭の中に入って来ない。問題は、高広が、その努力の意味を見失いつつあることだった。

人間は、なぜ「努力」するのだろうか？と、高広は考える。生きて行くため？僕は生きて行くために努力する必要がない。なりたくないものになるため？僕には、なりたくないものも、したいことも、欲しいものもない。「バスケが楽しい」と思えなくなりつつあることに、高広は恐怖を覚えてつつあった。僕は「何もしない人」になってしまうのではないのだろうか？

「この先、高校生、大学生、そして大人になれば、好きな女の人が出来た時、たぶん、お金をたくさん払えば、その女の人と付き合うことは出来るのだろうかと思う。でも、そうして付き合った女の人と一緒にいても、楽しいとは思えないだろう。その女の方は、僕にお金がなくなれば、僕と付き合うことを止める。だったら、その女の方は、僕を好きになつたわけではなく、僕を持っているお金を好きになつただけだ。そんな女の人を、やっぱり、僕は好きになれない。僕の

「ことを好きだ」と言ってくれる女の人が、この先現れたとしても、本当に僕のことを好きなのか、僕の持つているお金が好きなのか、どうやって見分ければいいのかだろう？、そんなことを考えていると、高広には、むしろ、貧乏な人が羨ましく思えて来た。少なくとも、貧乏な男の人は、自分を好きだ、と言ってくれる女の人のことで、そんな悩みを持たずに済む。もし、僕がものすごく貧乏だったら、自動販売機で買った130円のジュースが、どれほど美味しく感じられるだろう。特Aランクの黒毛和牛や世界中の美味珍味にうんざりと飽きてしまうこともないだろう。お金がなければ、どれだけ幸せだろう？、お金がなければ、どんな楽しいことがあるのだろうか？

小学5年生の夏休みの宿題で出た「将来の夢」という作文で、高広は「貧乏になる」というタイトルで文章を書いた。書いた作文を、提出する前に、祖母に読んでもらった。

「いいんじゃない」と、祖母は言った。

「おばあちゃんのお金はゼロ。お金はすべて、あなたのお金。自由に使えばいい。でも、最終的な使い道を決めるのは、二十歳になってからにしなさい」と。

~~*

私立に進んだ中学2年生の時、100万円払ったら、学校で一番可愛い先輩が付き合ってくれたが、三日で別れた。もちろん、お金を返して欲しいとは思わなかった。中学の時の成績は中の中だったが、おばあちゃんが電話してくれて、都内で偏差値がトップの高校に進学出来た。特に、その学校が好きだったわけではない。どこでも選べるなら、そこでいい、というだけの話だった。生徒は全員、血眼で東大進学を目指していた。僕は、ハーヴァードだろうが、ケンブリッジだろうが、どこでも行きたい大学に行ける。でも、行ってどうする？、と、また考える。相変わらず、欲しい物も、したいことも、なりたいたものもない。なくても、別に生きて行くためには困らない。困らないけど、楽しいこともない。とれだけ使っても、使っても、お金はなくなる。使い道がない。お金の減らしようがない。生きて行くには困らないけど、楽しくない人。だったら、生きて行くのは大変だけど、楽しい人生の方が、100万倍いいに決まっている。とは言え、お金を捨てる」ということは出来ない。真っ先に頭に浮かんだのは、困っている人のために、どこかに寄付してしまうことだったが、それは、あまりにも短絡的な考え方に思えた。

「100円のお金が必要なんだ」

じゃあ、あ、う、す、わ、ね、ほ、う、い、い、へ、ら、考、え、て、も、結、論、は、出、な、か、っ、た。

結局、高広は大学には進学しなかった。かつて「貧乏になりたい」と夢見たものの、実際に、「いこくまで貧乏になる勇気は持てなかった。どの程度の貧乏なら、人生を楽しめるものなのか。その判断も出来なかった。中途半端な金持ちとか、困らない程度の中流ではつまらない。」

外に出よう、と、高広は思った。高広は、まだ、東京から外に出たことがなかった。外に出よう、と思った。とりあえず。考え込むより前に。ヒマラヤのてっぺんだろうが、マリアナ海溝の海底だろうが、宇宙だろうが、金を積めば行けない場所はない。でも、特に行きたい場所はない。コンビニに行くついでに、フラッと旅に出てみよう。そう思った。

* 4 *

「おばあちゃん、ちょっと旅に出ます。戻るまで、スマホを預かっておいて下さい」

というメモとスマホをリビングのテーブルに置き、固定電話でタクシーを呼んで、タクシーで羽田まで行った。

やじ、どうしようっ？

と思った。ここから先のことは何も考えていない。空港ロビーで周囲を見回していると、「鬼之島フェア」と書かれたのぼり(旗)の立つアンテナ・ショップらしき店が目に入った。「鬼之島？」聞いたことがない。のぼりの隣に立っていた、ミニスカートにエプロンを付けた若い女性に声を掛けた。

「あの、鬼之島ってどこにあるんですか？」

「いらっしやいませ」と言って振り向いた彼女の顔を見て、綺麗な子だな、と高広は思った。

「っ、いかがですか？」

「トレイを差し出されたので、楊枝をつまむ。

「これ、何ですか？」

「トビウオのお刺身。鬼之島の名産なんです」

初めて食べたが、美味しかった。

「美味しいです」と、高広は言った。「ところで、鬼之島ってどこにあるんですか？」と続けた。

「知らない」と、彼女は言った。言った直後、それまで浮かべていた愛想笑いを解いて、素の表情になっていた。

「だって、わたし、ただのバイトだもん。立って笑っているだけで、時給1500円。知るわけないじゃん。鬼之島なんて」

「大学生っ？」

と、高広は訊いた。

「そう。上智の2年生。あなたは？」

「ただの無職」

「なんだ」

彼女は、素のままの表情でがっかりしてみせた。

「顔がイケてるから、いいかも、と思ったけど、無職はちょっとね。ラインだけ交換しとく？」

「僕、スマホ持っていないんだ」

「マジか、そこまで貧乏なのか。わたし、自分より貧乏な男はだめだわ」

「誰も君のことを口説いてはいないよ」

「ごめん、ここに立っているのと、よく口説かれるから。でも、あなたも、わたしのことを口説きたいと思ったでしょ」

「少し」高広は、少し頬を赤らめた。

「見た目いいのに、もったいないね。ちゃんと働いて、お金作りなよ。いくつ？」

「18歳」

「わたしの2コ下か。どうして大学行かないの？ あ、ごめん。お金がないからか。鬼之島に行きたいの？ 何しに？」と彼女は訊いた。

高広は、まったくプランのないままに会話を進めていたのだが、この出会いに乗ってみることにした。

「一緒に行かない？」と、高広は彼女に笑顔を真つすくに向けた。

「え？ わたしと？ 鬼之島に？」

「うん」と高広は即答した。

「だって、お金ないんでしょ？」と、彼女は、美しいラインを描く眉の間に皺を寄せた。

「高校卒業してから、バイトして頑張って貯めたから。君と一緒に旅行して、ナニやかに遊ぶくらいの手持ちはあるんだ」

「わたしが、あなたと旅行に行くの？ 今から？ いきなり？」

「行こう！」

勢いよくその言うごとく、高広は、彼女のトレイを持っていない方の左手を強く掴み、引っ張って大股で歩き始めた。高広に半ば、引きずられるように歩きながら、彼女は悲鳴にも近い声を上げた。

「待って、待ってよ。いきなり過ぎるよ。荷物だつて、ロッカーに置きっぱなしだし、スマホも持って来ないし、だいたい、あなたのこと、よく知らないし。待ってよ、これじゃ、誘拐だよ」

「そつだよ。誘拐だよ。僕は君を誘拐するんだ」

高広は笑顔で言うごとく、彼女が手にしていた「トビウオの刺身」の乗ったトレイを、近くにあった分別式のゴミ箱に捨てた。「可燃」に。

5

「何か、乗っちゃっていい？」

小泉雪奈(こいずみゆきな)は、膝の上のエプロンを見下ろしながら呟いた。紺色のエプロンには「鬼の島入り」の文字と「とく」と「ピー」と、鬼のゆるキャラがプリントアウトされている。

「なんの言葉は、まだ、名前訊いていなかったね」

隣に座る男の子には、まるで屈託というものが無い。邪気がない、と言っべきか。いやらしさが感じられない。

「コイズミ・ユキナ。あなたは？」

「瀬川(せがわ)高広。よろしく」

手を差し出されたので、一瞬、躊躇(ちゆうちゆう)してから、その手を軽く握った。

二人は、鬼之島直行便の小型機のシートに並んで座っていた。離陸してから、すでに30分程経過しており、機体は安定している。機内は9割がた埋まっているが、満席ではない。

何も考えずに乗ってしまった。本当に、何も考えずに。それぐらい、高広は強引だった。考える暇もないままに、今、こうして、18歳の無職の男の子の隣に座っている。

強引に押し倒そうとする男は、これまでもいたけれど、誘拐されたのは、初めてだった。当たり前だ。こんな話、聞いたことが無い。

「どうして、わたしは、ここに座っているの？」

高広に訊いた。

「運命？」

高広が屈託なく笑う。バツバタでクサすぎる。でも、正直、ほんの少しだけ「キーン」とした。

高広の見た目は悪くない。むしろ、かなりいい。ナチュラル・ウエーブで長過ぎない黒髪は清潔感があるし、肌もツヤツヤで綺麗。服も、安物だろうに、センスはいい。改めて見ると、不思議な男の子だな、と思う。高卒無職なのに、どこか垢(あか)抜けていて品がある。

運命？

運命と言われれば、そんな気がしなくもない。

「わたしを誘拐して、どうするつもりなの？」訊いた。

「楽しむ。エッチ抜きで」高広が即答した。

「エッチ抜き？」

「約束する。だから、あきらめて、僕と楽しく旅行しよう」

「だって、わたし、何も持って来っていないんだよ。お財布はあるけど、3万円しか入っていない。

「一応、カードは使えるけど」

「雪奈さんは、何も心配しなくていい。ゼーんぶ、僕が何とかする」

はあ、とため息を付いて、雪奈は肩からすべての力を抜き、シートに身体を預けた。

めっちゃ、自信家やんけ、この男。年下のくせに。金ないくせに。

「分かった。高広君の言葉を信じる。でも、運命かどうかは、後で決める」

「ありがとう」

そう言っただけ微笑む高広の表情は、妙に大人びていた。

エッチは抜きで。と言った言葉に嘘はなかった。ただ、隣に座る雪奈のミニスカートから伸びる白い太ももは、18歳男子には刺激的過ぎた。

改めて、雪奈の顔を見る。綺麗とも言えるし、可愛いとも言える。マイルドルや女優の美しさではない。普通の二十歳の大学生として、いい感じ。栗色でゆるふわなセミロングも、いまどきで、高広的に好感度が高い。

「この女の子と、これから旅をする。

そう考えると、胸がときめいた。心臓がトランポリンの上で跳ねているように。こんな感覚は、これまで味わった経験がなかった。

高校を卒業するまで、お金を払って、何人かの美しい女の子とお付き合いをした。もちろん、セックスも経験している。でも、女の子と一緒にいて「楽しい」と思えたのは、初めてだった。たぶん、それは、この女の子に、資産の話をしていないからだ。

何も考えずに、勢いだけでここまで来た。でも、たぶん、ここまででは正解。

「ね、手は繋いでもいい？」高広は雪奈に訊いた。

「だめ」と、雪奈が言った。「次、触ったら、警察に通報するからね」

「分かった」と、高広は言った。

日本銀行の資産が約500兆円。日本の純資産総計が約2000兆円。アメリカの純資産総計が約4000兆円。借金を差引いたら、国家としてはどちらも大赤字。僕が欲しいと思えば、両方、国ごと買うことが出来る。でも、彼女には、高卒無職で通そう、少なくとも、旅行の間は。そう、思った。

「国、買っても意味ないよな」知らず、呟いていた。

「クニカって、誰？」と、雪奈が訊いた。

「クニカ？」

「クニカって、モテないよな。って、今、言ったでしょ」

ああ、と言って、高広は笑った。

「あんまり可愛くない高校の同級生のことを、ふと思いついていたんだよ。雪奈」

「いきなり呼び捨てかよ、高広」

雪奈の声のトーンが若干、低くなった。

「だめ？」高広が訊いた。

「いいけど、別に。いいけど、高広君、高広、何かと強引だよな」

「人の都合を考えないヤツとは、よく言われね」

「誘拐って、一番、人の都合を考えていない行為だと思っ」

「怒っている？ 無理やり連れて来たこと」高広が下から顔をのぞき込むように言うと、雪奈はしばらく考え込んでから「よく分からない」と小さな声で言い、窓の外に浮かぶ白い雲に目を向けた。

7

鬼之島空港を出た二人は、目の前にあった「鬼之島観光案内所」に入った。来たことは来たが、そもそも、「この島が日本のどこに位置しているのかすら知らない。まさに右も左も分からない状態だった。

一階建てのビルの自動ドアをくぐると、カウンターの向こうから「こんにちは」と言って、小柄ではげたおじさんが出て来た。

「こんにちは」

「こんにちは」

と、二人とも軽く会釈を返した。

「すみません。鬼之島のことを何も知らずに、勢いで来てしまったもので、この島のことについて、教えてもらえませんか？」と、高広がおじさんに言った。

「小出(こいで)というネームプレートを胸に付けたおじさんは」そういうことでしたら、そちらに」と、部屋右隅にあったソファ席に二人を案内した。「少々、お待ちください」

しばらくして、小出さんは、お盆にグラスを二つ載せて戻って来た。「名産のオリーブ・ジュースです。ぜひ、飲んでみて下さい」

二人は「いただきます」と言って、グラスに口を付けた。甘くて薄いオリーブオイルの味がした。「不思議な味ですね」雪奈が言うと、小出さんは笑顔を浮かべ、ガラステーブルの上に、観光マップを広げた。

鬼之島は瀬戸内海にあり、香川県に属す。小豆島(しょうじま)と双子島と呼ばれ、橋で結ばれている。1500平方キロある小豆島と比べ、遥かに小さく、11平方キロと千代田区と同じほどの面積しかない。ただ、鬼之島は、周囲に正体不明の海底遺跡らしきものが多数点在するため、世界有数のダイビング・スポットとして名を馳せており、観光整備は、非常に発達している。島民の数は、2万人ほどだが、現在、夏のシーズンには、15万人の観光客、ダイバーが訪れる。空港から直結して、ショッピング・モールが続いており、伊勢丹もある。メインのダイビング・スポットは島に三カ所あり、その三カ所には、リゾート・ホテルもある。観光名所は島の、ちよつと中心に位置する鬼の山山頂に立つ鬼神(きしん)神社。日本神話において、天孫(ニギ)が国土を荒らす鬼を退治して、封じ込めた場所とされており、奇岩が連なる。また、島の南には「エンジェル・ロード」と呼ばれる砂の道があり、一日2回、干潮時に海の中から現れる。大切な人と手を繋いで渡ると、願いが叶うと言われており、カップルに人気のスポットになっている。

小出さんは、それだけ説明すると、二人に観光パンフレットを渡し、「こちらにどうぞ」と声を掛けて、建物の外の駐輪場に案内した。そこには、緑色に塗装されたカゴ付きのビーチ・サイクルが20台ほど駐輪されていた。どの車体も、よく磨き上げられており、夏の午後の日差しを受けて輝いている。

「狭い島です。公共交通機関はありません。これで、どこへでも行けますから。無料でレンタルしています。島を出られる時に、ここに戻しておいて頂ければ、それで結構です」

「何か、ワクワクして来た」と言っ、雪奈が高広に笑顔を向けた。

「来て良かった？」と高広が訊く。

「不本意だけど、何か、楽しい」と言っ、雪奈がビーチ・サイクルのハンドルに手を載せた。

「伊勢丹って？」高広が小出さんに顔を向けると、小出さんがショッピング・モールを指差し「自転車です」と言っ、

「いろいろ、どうも、ありがとございました」

二人が頭を下げると、小出さんも頭を下げ「ちよつと、高いですけど、お二人なら、エンジン・ロードの側にある『ザ・ラマヌジャン・グランデ』という宿がお勧めです。夜景がともロマンティックなので」と言っ、手を振った。二人も手を振り返し、同時に自転車のペダルを踏んだ。

* * *

伊勢丹で必要品を一通り買い揃えた二人は、クラシカルでアンティークな、しかし高級感の漂う『ザ・ラマヌジャン・グランデ』の、ジュニア・スイートにチェックインした。受付カウンターで雪奈が小声で「大丈夫なの？ お金」と不安そうにささやいたが、高広は「大丈夫、何とかなる。何とかならないことなんて、この世にないんだ」と、雪奈に笑顔を向けた。

雪奈は、また不思議な気分になった。伊勢丹でもそうだったが、この男の子は、お金を使うことに頓着（とんちやく）しない。お金に執着がないように見える。

「これまで、金持ちのおやじと遊んだこともあったが、金持ちは金持ちであることを、ひけらかしたがる。特に、若い女には。お金に頓着しない、執着しない、というのは、よほど、育ちがいいとしか思えない。高卒無職。もしかして、働く必要がないほどの金持ちということなのか？」の高広君は、まじかぬ。

ベルボーイが持つほどの荷物はない。部屋のキーを受け取った高広は「行こう」と、明るく弾んだ声で雪奈の右手を取った。「あ、触った。警察に通報する」雪奈が言っ、「いいよ、しなみ」と、屈託なく笑っ。雪奈は、あきらめて、最後まで外さないでいた心のガードを、解いた。そして、高広の手を握り返した。

スイートのドアを開けると、部屋の中は明るい陽ざしで満ちていた。90平米ほどのワンルームで、キングサイズのベッドやソファセット、テレビ、パソコン、書棚などが、余裕を持って配

置されている。バルコニーも広く、ジャグジーからは、星空を見上げることが出来そうだった。バルコニーに並んで立つ二人の髪を、穏やかな夏の海風が揺らす。

「たぶん、あそこがエンジェル・ロードだね」

高広が部屋の正面、眼下に広がる砂浜を指差す。

「たぶん、干潮になると、あそここの鐘のある浮島まで、濡れずに歩いて行けるんだよ」

「高広、ベッドが一つしかない」

「うん、一緒に寝ようよ」

「エッチは抜きって約束でしょ」

「エッチは抜きで一緒に寝ようよ」

「可能なの？ そんなこと」

「おやじとは違う。僕はまだ若い。何だって出来る。女を見ればセックスすることしか考えない、昭和世代とは違うんだ。時代は令和だよ」

「キスしてもいいよ」と雪奈は言った。

「ありがとう」

そう言うと、高広は、サクッと雪奈にキスした。

何だか物足りない。そう感じてしまう自分が、雪奈は悔しかった。高広を、好きになってしまったのかも知れなかった。

* * *

その晩、二人、裸になって一緒にジャグジーに浸かった。

もう、「この人にお金のことは何も訊かないようにしよう」と雪奈は心に決めていた。

「高広は、どうするの？」「これから」

夜空に瞬く星の数は、東京の10000倍、と言っても過言ではないような気がする。

「何も考えないな」

と、高広は答える。やっぱり、と雪奈は思う。

「でも、考えなくちゃいけないとは思っているんだ。これからどう生きて行くのかを」

星空の下で、高広の顔を見る。ツヤのいい肌。そこに深刻さを感じられない。

「いいなあ、呑気(のんき)で。わたし、東京戻ったら、そろそろ就活のこと、考えないと」

「希望する職種はあるの？」

高広と眼が合う。

「出来れば、広告。でも、ムリだろうーな」

「無理って、決め付けちゃうのは、良くない」

「ねえ、高広のその自信は、どこから来るの。あなた、苦労したこと、ないんじゃない？」

「たぶん、普通の人味が味わう苦労はしたことがない。でも、普通の人味が味わわずに済む苦労は嫌」と言っただけでいい

やっぱり、不思議な人。と、雪奈は思う。それ以上、その話を追求するつもりはなかった。

「ねえ、高広。思ったんだけど。スマホがない生活っていいね。スマホがないと、何か、時間गतてもゆっくり流れる。スマホは便利だし、なくちゃ生きていけないと思っていただけ、もしかしたら、スマホなんてない方が、人間は幸せに生きることが出来るのかもね。もし、今、スマホを持っていたら、絶対、ラインとかインスタのこととか考えているし。本当は、そんなこと、考えなくていいことなの。」

高広は、湯気で赤らめた頬で二度、うなずいた。

「だよ。僕も家にスマホを置いて出て来ただけで、普段は使っているけど、スマホはあんまり好きじゃない。もはや、インフラだから、仕方なく使うけど、スマホに使われる人間にだけはなりたくないと思っている。」

高広は、メイクを落とした雪奈の顔を見る。メイクを落としても雪奈は綺麗だ。裸になってもスタイルはいい。抱きたいか？と訊かれれば、もちろん、抱きたい。でも、そうすべき相手と、そうすべきではない相手を、高広は心得ていた。セックスは恋愛の寿命を縮める。雪奈に対する思いは、まだ、恋と呼べる段階ではなかったが、彼女を性欲の対象として見ることは抵抗があった。

「ところで、雪奈は実家？」両親は何をしている人？」

「うん。一人っ子で実家暮らし。実家は渋谷にある。お父さんは大学教授で、お母さんは専業主婦。実家は裕福な方だから、結婚出来るなら、それまでは花嫁修業でもいいんだけどね。」

言うてから、しまった、と思った。何が、しまったのか、よく分からないけれど「結婚」という言葉は、男の子の前でうかつに口にすべき言葉ではない。相手が例え、無職の18歳でも。高広と結婚？それはあり得ない。あり得ないにしても。だいたい、まだ、付き合っているわけでもないのだし。

慌てて、言葉を返す。

「高広は？」両親は、何をしている人なの？」

「僕、親いないんだ。おばあちゃんと二人暮らし。」

「あ、ごめん。そ、そうなんだ。」

益々、高広が謎めいて見えて来る。親がいない？」

「あ、その、両親は、事故か何かで亡くなったの？」

「知らないんだ。親のことは何も知らない。お父さんのことも、お母さんのことも。ずっとおばあちゃんに育てられて来たから。でも、止めない？」の語

「ごめん、だよ。ね、ごめん。そうだ、ねえ、あの、明日は、どうする？海？山？」

「何か、一泊したら、気が済んじゃって。」

楽しんで、うん、うん、と、高広は夜空に向けて「はあ、あ、あ、あ」と、白い息を吐いた。そして、続けた。

「関西空港まで直行便があるんだ。だから、明日の昼の便で鬼之島空港から関西に飛んで、そこからロンドンへ行くと思う。特に理由はないのだけど、単なる思い付きで。一応、パスポート

トは持つて来ているから」

嘩然(あぜん)として、雪奈は高広の顔を見た。人の都合を考えないにも程がある。

「さすがに、雪奈を海外にまで連れ回すわけにはいかないだろう?」

高広が、また、例の屈託のない笑みを浮かべる。

誘拐してよ。ここまで誘拐したんだから、連れて行って。そう言いそうになり、言葉を飲み込む。理由がよく分からないまま、無性に腹が立ち、ジャグジーを出る。バスタオルで体を拭き、下着を付けて、ホテルに備え付けのバスローブを着て、キングサイズのベッドに一人でもぐり込んだ。

「雪奈、実家に電話一本、入れておいた方がいいよ。心配するだろうから」

バルコニーから届く、高広の、そんな冷静な声が、余計に腹立たしかった。

翌日、せっかく来たのだから、しばらく観光してから帰る、と言う雪奈に、何の執着も見せずに「またね」と手を振り、高広はビーチ・サイクルでホテルを去って行った。ラインすら交換していないのだ。「またが、あるわけない。「運命」じゃなかったのかよ。雪奈は、まだ、恋もしていないのに、失恋した。高広の後姿を見送りながら、泣きそうになったが、悔しくて我慢した。

100

延長滞在など、大使館に金を積めばどうにでもなる。高広は、1年掛けて、ロンドンの街を隅から隅まで隈(くま)なく歩き回った後、スコットランドのアラン島に渡った。

アラン島のことは、高校生の時に『WOMOMOM』で観た『アラン』という映画で知った。古い古い白黒のドキュメンタリー映画で、荒涼たる孤島で大自然と闘いながら、しびとくたくましく生きる家族を無音で描く。その映画を観た時、高広は、日本はなんと恵まれた国なのだろうと、素直に安堵(あんど)した。自分は確かに経済的に恵まれている。でも、自分以外のほとんどの日本人も、こんな苦労はせずに、屋根の下で、電気と水道と工に守られて生活している。路上生活者は大変かも知れないが、少なくとも日本で餓死者が出たというニュースは聞いたことがない。そして、いつか、そこに行ってみたいと思った。もし、自分が映画『アラン』のような環境に置かれ、生活することになったら、僕はそこで生きて行くことが出来るだろうか?そこで、何を感じ、何を思うだろうか?

訪れたアラン島は、既に観光地化されており、映画のような殺伐とした生活は、もう、そこに見出すことは出来なかった。ただ、自然は、あのままだった。岩だらけで木も土もない断崖絶壁に噛み付く荒波。吹きすさぶ風。画面で見た通りの清冽(せいれつ)な空気。「美しい大自然」と触れ合うことも出来た。ストーンサークルやウィスキーの蒸留所もあった。でも、高広は、映画で観た光景の広がる断崖絶壁に、強引にキャンプを張り、独り、そこで1週間を過ごした。真冬だったため、夜は、テントの中で固形燃料を燃やし、寝袋に入っても、歯がガチガチと音を立てた。強風でテントごと吹き飛ばされそうになったこともあった。絶壁の眼下では、常に濃

いグレーの色をした波が荒れ狂い、渦を巻いていた。曇天(どんてん)が続き、キャンプを張ってから一度も、太陽を見ていなかった。しかし、8日目、テントから這(はい)出した高広の眼を海面に反射する強烈な朝日が射抜いた。突然「分かった」と感じた。「1京円」の使い道が見えた。そのこのために、「ここに来たわけではなかったが、そのことが、ずっと、ずっと、長い間、頭の中に重荷としてあった。

ものすくなく、でっかいウンコを排泄した気分だった。清々しい、と高広は感じた。もう、悩むことなく生きて行くことが出来る。少なくとも、金に関しては。金はなくても困るが、あり過ぎても困る。1京円の金にも、ちゃんと正しい使い道がある。無駄遣いにはならない、正しく、楽しい使い道が。でも、その「力」を行使するのは、40歳になってからにしよう。そう、心に誓った。

11

玄関を開けると、祖母はリビングのテーブルで新聞を読んでいた。

「ただいま」

一年半ぶりに会う祖母に言う。

「おかえり」

まるで孫が今朝、出かけて帰って来ただけのように、祖母も答える。

「ばっちゃん、心配した？」訊く。

「ばっちゃん？ わたしは『ばっちゃん』になったの？」と祖母が言う。

「うん。今日から、おばあちゃんのことばは『ばっちゃん』って呼ぶ？.. いろいろ」

祖母は顔の皺(しわ)を増やして笑う。

「まあ、おばあちゃんでも、ばっちゃんでも、敦乃(あつの)あつ(あつ)の(あつ)でも、何でもいいけどね。心配はしていなかったよ、まったく。あんたは図太くて、たくましいから。温室育ちの大木だよ。その顔を見れば分かる。また、一回りたくましくなったね」

「久しぶりに、ばっちゃんの作る雑炊(ぞうすい)が食べたくなって、帰って来た」

「じゃあ、スーパーまでデートしようか」と言うって、ばっちゃんは、新聞を畳んだ。

米は契約している新潟の農家から定期的に送られて来るし、すぐに使えるよう、炊いた米を冷凍してある。近所のピーコックで、卵とニラだけ買い、荷物は高広が持って、マンションのエントランスを入ったところで別れた。下りはエレベーターだが、ばっちゃんは、家に戻る時、いつも階段を使う。39階まで、560段を上がる。高広が記憶にある限り、その習慣を続けているから、並みの20代よりも、はるかに脚力、体力がある。ただし、本人が言うところの暇つぶしの趣味だから、時間は掛かる。

リビングで腹を空かして待っていると、1時間後に、ばっちゃんが帰宅した。いつものことだが、息も切れていないし、顔も紅潮していない。

「お腹が空いた」

「すべ、作るね」

30分後、「いただきます」と手を合わせ、二人は向き合って、雑炊を食べ始めた。

「うまい。やっぱり、うまい。これだよ、これ。ばっちゃん、この味が食べたかったんだ。イギリ
スって、庶民のメシは、まずいんだよ」

「そう言ってもらえれば、冥利に尽きるよ。相愛変わらず、あんたは、ご飯を美味しくに食べる
ねん」

「まずい時は、美味しくそうには食べない」

祖母は微笑むと訊いた。

「それで。それで、一年半も旅をして、何か見付かったのかい？」

高広は、匙(さじ)を持つ手を止めずに答えた。

「最初に可愛い女の子と出会った。それから、人生の目標を見付けた」

「人生の目標？」

「うん。1京円の使い道」

「そう。その『答え』に、あんたは納得しているんだね」

「うん。100%、納得している」

「なら、いいんだ。自分が心底、納得出来るかどうか、大事なことからね」

「ただね」と、高広は言った。「その『力』を行使するのは、40歳になってからにする」

「それは好きにすればいい。高広のお金だ。わたしは、ただ、預かっているだけだから」

「ばっちゃんには、ないの？」高広は、指で口元を拭い、祖母の眼を見た。

「ないのって、何が？」祖母が、柔らかく孫を見つめ、可愛らしく、小首を傾(かしげ)げる。

「人生の夢とか目標」

「ははは、と、祖母は声を出して笑った。

「72歳で、人生の夢も目標もないだろう。後は死ぬだけ。気楽なものだよ」

「何も無いの？ 例えば、僕にして欲しいこととか」

「はい、はい、ばっちゃんは、真剣に考え込んでから言った。

「あんたに負担を掛けるようなことはいいたくないんだけど。もし、正直に言っていいたいと言
うのなら、高広の子どもを、ひ孫の顔を拝んでから、死にたいね」

「分かった」と、高広は明るく言った。「ばっちゃんには、どう頑張っても返しきれないほどの恩
義があるから。叶えるのよ、その、ばっちゃんとの夢」

「叶えるのよ、叶えるのよ」

「結婚するのよ。結婚して、子どもを作る」

「相手は？」

「子どもを産んでくれれば、誰でもいいんだ。すべ、見付かるのよ」

高広は、屈託なく笑った。

「その、最初に出会った女の子とは、今でも、連絡を取っているのかい？」

「とても素敵なお子だったけど、彼女は連絡先も知らない。いいんだ、彼女は夢の中の存在でい

てくれれば」

正直なところ、高広は、もう、雪奈の顔も忘れかけていた。ただ、ジャグジーの湯の中で輝いていた白い裸体だけは、いつまでも、脳裏から消えずにあった。

「馳走様。美味しかった。ありがとう」

高広は、二人分の食器を流しに持って行き、手洗いすると、自室に入り、Pの起動した。

12

「低所得者層向け お見合い マッチング・サイト」というキーワードで検索を掛け、ヒットしたサイトをいくつか軽く閲覧(えつらん)してから『ハッピー・ウェディング』というサイトに登録した。経費を口座から自動引き落としに設定し、エントリー・シートに条件を入力して行く。『ハッピー・ウェディング』は、男の方から相手に条件を求めることが出来ず、男が女から選ぶでもらう、というシステムになっていた。

「桜木花道」という偽名を使った。職業はウェブ・ライター、年収を280万円、都内在住、親とは別居で入力する。他の項目はすべて空欄で送信した。送信出来た。年会費3000円で使い放題というだけあって、いかにも安易な仕組みに、少し、驚く。

自室を出てキッチンに行き、ポッドに淹れたコーヒーを飲んでから、トイレで小便をして、また、部屋に戻ると、メールが2通、着信していた。

一通目は、岸本花子という女性からで、40代、と自己紹介していた。出産には適さない。「ごめんなさい」と即座にレスする。もう、一通目は、中宮春子という30代の女性で、こちらは、真剣に、切実な内容のメールだった。

桜木花道様(笑)って名前も、もちろん、偽名ですよ。当たり前か(笑)こんなお安いサイト、冷やかしばっかりってことは、よく承知しているのですが、万に一つ、マジメな人が登録している可能性を信じて、正直に書きます。

私と結婚して下さい。贅沢は言いません。職業なんて、何だっでもいいです。年収が低くても構いません。私、ブスです。お笑い芸人の「彦猿(ひこざる)」に似ているって、よく言われます。実家暮らしで、母親はもう亡くなっているんですけど、父親の介護がもう、一人では限界です。要介護認定の問題で施設には入れられなくて、でも、ヘルパーさんだけじゃ、とても、やって行けなくて。孤独だし。彼氏がいた「ともないし。なんか、人生、もう、やだ。無理ですよ、私、結婚なんて、ごめんなさい。愚痴になっちゃった。結婚してくれなくてもいいから、一回だけ、こんな私とデートしてもらえませんか？」

あなたが、どんなルックスでも構いません。私、相手の見た目とか気にしないし。そりゃ、イケメンの方がいいに決まっているけど、私みたいな女が、そんな贅沢言えないことは、よく分かっているし。あ、ごめんなさい。桜木さんが、イケてない、って言っているわけじゃないんです。気にしないって言っているだけです。ウザいですよね。ごめんなさい。私が結婚出来たら夢みただけど、せめて、一回だけ、一緒に食事してもらえませんか？ もちろん、私がご馳走しますから。お願いします。お願いします。死ぬまでに、一回だけでも、男の人と「デート」したいんです。

メールは唐突に、そこで途切れていた。「結婚を前提に、僕とお付き合いして下さい。デートの詳細は、改めて詰めましょう」高広は、こちらのメールにも、即座にレスした。もちろん、結婚を前提にお付き合いするつもりだった。真剣に。

13

そこからの中宮春子とのやり取りは早かった。『ハッピー・ウェディング』に会員登録してから三日後、約束した店に向かうために、高広は夕刻の市ヶ谷駅ホームに立っていた。妙なな、と思つた時は、既に千葉に向かう電車が視界に入っていた。前に立つ女性が、ふらふらしており、足がおぼつかない。

危ない！

高広が、その女性の腕を強引に引っ張つたのと同時に、電車がホームに入った。

「大丈夫ですか？ どうしたんですか？」

軟体動物のように、身体に力が入っていないその女性は、高広の腕の中で、涙を流していた。雪奈だった。

14

「落ち着いた？」

改札を出たところにあるベンチに並んで座らせた雪奈に訊く。雪奈は、高広が自販機で買ったミネラルウォーターを、もう一口、飲み込み、黙つてうなずいた。

「どうしたの？ 何があったの？」

「死のうと思つて」即答だった。「まさか、高広に邪魔されるとは思っていなかった」

雪奈にかつての可憐(かれん)な面影はない。顔色は青白く、10キロは痩せただろう。服装も、どこか小汚かった。

高広は、何も言わずに、彼女が話し始めるのを待った。10分、待った。

「相談じゃないよ」雪奈が邪険に言葉を発した。

「相談したって、どうにもならないことだし。でも、裸でお風呂に入った仲だもんね。死ぬ前に話だけ聞いて」

「もちろん」と、高広は答えた。「」でいい?」「訊くと」「」でいい」と雪奈は言った。そして、事情を語り始めた。

「わたしのお父さんてね」雪奈は涙も拭かずに顔を上げ、場違いなほどに明るく微笑んだ。

「絵にかいたような象牙の塔の住人なの」

「大学教授って、言っていたよね」

高広は雪奈の言葉を邪魔しないように、気を回しながら言葉を挟んだ。

「うん。東大の名誉教授。だから、お給料はいいの。でも、あの人、学問のことしか分からないから。世間知らずで、実際的なことに関しては、まったくの無能だから。だから、小学校の同窓会で会った、何十年ぶりかで再会した昔の友だちの借金の保証人に気軽に「ハン」押しちゃって。分かるでしょ? わたしたち家族、わたしと、お父さんと、お母さんと、もう、帰る家がないの。何とかなるなら、わたしたちも必死で返済しようと思う。命を、そう気軽に捨てたりはしない。でも、無理だから。不可能な額だから」

「いくら借金があるの?」

「言いたくない」

「話だけでも聞かせてよ」

「言いたくない。バカみたいだもん」

「言っつね」

「笑わないって、約束すまっ?」

「約束すま」

高広はこの上もなく真剣な顔で雪奈にうなずいて見せた。

「じゅういち・おく・えん」と、雪奈ははっきり単語を区切って言った。

「11億円」高広には、その額が借金として多いのか、少ないのか、実感としてよく分からない。「11億円。アホみたいな数字だよ。でも、いくら父親のことを罵(のの)しつても、どうにもならない。いいよ、高広君。関わりたくないでしょ、こんな女と。もう、行っていいから。気にしないで。わたしのことは、忘れて」

ジャグジーの湯の中で輝いていた白い裸体の記憶。その時、初めて、当時の雪奈の顔がフラッシュバックした。トランポリンの上で跳ねていた心臓の感覚も。

高広は、雪奈の顔を両手で挟むと、自分の顔を直視させ、はっきりとした笑顔を浮かべ、言った。た。

「僕の頼みを一つだけ聞いてくれたら、その金は僕が払う」

「頼みって?」雪奈は事態を上手く飲み込むことが出来ずに、瞬きを繰り返した。
「僕と結婚して、僕の子どもを産んでくれないか?」

15

一週間後、二人は、鬼之島のエンジェル・ロードを、手を強く握り合い、歩いてきた。夕陽が半分、海面に沈んでいる。神のオーラに包まれたように、辺りは不思議な色の光に満ちていた。

「ねえ、高広」

そう言うて見上げる雪奈は、以前にも増して可憐だった。つい、軽くキスしてしまう。キスされた雪奈も、明るく微笑む。

「ねえ、高広。ここをカップルが手を繋いで歩くと、願いが叶うんだって。何をお願いする?」

「元気な赤ちゃんが生まれますように、って。それだけ」

「今日、する?」

「うん、今日、する」

「いいけど」

雪奈は、そう言うて、手を繋いだまま、砂の道のちようど真ん中で立ち止まった。

「高広」

高広は、雪奈の顔をじつと見つめる。その眼の端に輝いている水滴が、喜びを表すのか、悲しみを表すのか、高広には分からない。

「高広は、正直正銘の恩人だから、余計なことは、これからも一切、言わないつもり。でも、セックスする前に、一つだけ質問させて。あなたは、子どもを産んでくれば、結婚相手は誰でも良かったの?」

理由は分からないのに、高広は自分の眼の端も濡れたのを感じた。雪奈に気付かれないように、ハット指で水滴を拭く。

「僕、理屈っぽいところがあるから。愛って言葉は、愛って何かを知っている人間しか使ってはいけないような気がしていたんだ。だから、これまで『愛している』とは誰にも言ったことがない。前に、ここに来た時は、雪奈のこと、綺麗だな、可愛いな、としか思っていなかった。でも、こんなことを言ったら、雪奈に失礼かも知れないけど、今は、雪奈と一緒にいると、ぼっちゃんといる時と同じように、居心地が良くて、安心する。たぶん、僕は、雪奈のことを愛している。

キッパキッパ

「ありがとう」

そう言うて、雪奈は高広の胸に顔を埋(うず)めた。

再び、歩き始めた二人は、浮島の鐘の下の岩に腰を下ろした。

「それで、1京円は、どう使うことに決めたの?」

普通のデートに戻った雰囲気、雪奈が訊く。

「40歳まで、その『力』は使わないつもりだったのだけど、雪奈と結婚することを決めたら、も

う、どうでもよくなっちゃって。それで、昨日、ばっちゃんに電話した」

「それで、どうするの？」

「今夜のニュースで報道するって、言っていたから、一緒にテレビで見ようよ」

「何か、わくわくするね」

「うん。正しくもあり、楽しい使い道でもあるからね」

それから二人は、「ザ・ラマヌジャン・グランデ」のジュニア・スイートに戻り、ルームサービスの夕食を食べた。バルコニーの外には、満天の星空が広がり、テーブルにはキャンドルが揺れ、ヴィンテージのシャンパンが抜かれている。二人とも、何も喋（しゃべ）らなかつた。このまま、永遠に言葉を交わすことがなくても、気まずくなるようには感じられなかつた。二人とも、同じように感じていた。

高広は腕時計を確認してから、テーブルの上でフォークを持つ雪奈の指に触れた。

「そろそろかな。たぶん、民放の方が面白いと思う」

「テレビ、付けていい？」

雪奈が顔を輝かせる。高広の返事を待たずに、雪奈はリモコンのスイッチを入れた。入れた瞬間に、テレビ画面に

『緊急速報』

という文字が映った。夜の国会前からの中継で、若い女性キャスターが興奮気味に話し始めた。

「すみません。状況がうまく飲み込めないもので、私自身も若干混乱しているのですが、先ほど、官房長官より、『桜木花道』と名乗る人物から、日本政府に、1京円の募金があった、とマスコミに報告がありました。極めて異例の事態であり、政府には早急な対応が求められています。すでに野党合意の上で、国会審議抜きの特例措置として、消費税の廃止が決定され、国家が抱える一切の債務を既に返済したとのこと。日本政府の経済的なバランス、シーアの正確なところは、恐らく、首相自身も把握していないのではないかと考えられています。が、いずれにせよ、政府予算に、数千兆円の余裕というか、貯金が出ることは間違いなく、その突然増えた、巨大な予算枠を、今後、どう配分して行くか、課題が山積みとなっています。現場からは以上です。続報が入り次第、また、お知らせいたします」

画面がスタジオに集まった十数人の経済学者の顔に切り替わると、高広は、リモコンでスイッチを切った。

「ね、楽しいだろ？」

「うん、楽しい。でも、全部、寄付してしまつたら、わたしたちは、貧乏になってしまうって」

とっ」

「シリコンバレーの不動産だけ、残してあるから大丈夫」

「シリコンバレーの不動産って、どれくらい？」

「僕と雪奈と、僕たちの子どもと、ばっちゃんが生きて行くために困らないだけの額。無駄遣いをしなければね」

食事を終えた二人は、バルコニーに出て、並んで立った。

「星、すごいね」と雪奈。

「ね」と高広。

「高広、ごめん。もう一つだけ、お願いがある」

「うん」

「わたしたち、するの、初めてじゃない？」

「うん」

「ソニーする時、耳元で『愛してる』って、ちゃんと言ってる」

「うん」

「本当に分かった？」

「うん、本当に分かった。でも、ソニーされる時、僕にもちゃんと『愛してる』って言うって」

「もちろん」

「雪奈」高広はそう呟くと、雪奈の後ろに回り、背中をきつく抱き締めた。

「痛いよ、高広」と雪奈が笑う。

「雪奈、僕たちは、ずっとずっと仲良くやって行けそんな気がする。本当に、強く、そう思う」

「わたしも、そう思うよ、本当に」

そう言って、雪奈は振り返り、高広の唇に自分の唇を重ねた。

エンジェル・ロードの遙(はる)か沖合で、トビウオの群れが水面に跳ね、その羽が、月の光を浴びて、銀色に輝いていた。

生きてるっていいな。と、高広は、生まれて初めて心底、感じた。

△▽